

小型無人機ドローンを活用し、離島での遠隔診療のモデル地域とすることを目指した香川大学などの実証実験が30日、三豊市詫間町の栗島で始まった。同町の須田港を発着する片道4キロ余りの飛行ルートで医療機器などに見立てた物資の配送に成功し、将来の実用化に向けて一步を踏み出した。

医療機器配達実験に成功

栗島で香川大など3者

実証実験は、香川大瀬戸内圏研究センター、ドローン輸送の事業化を目指すベンチャー企業「かもめや」（高松市）、あいおいニッセイ同和損害保険の3者が共同で実施した。

栗島の住民が胸の痛みを訴え、島の診療所を訪れたと想定。診療所には十分な検査機能がないため、モバイル心電図を須田港からドローンで島に配達し、採血した試験管を島から須田港に運ぶとのシミュレーションで行った。

ドローンは強風や大雨への耐性が強いとされる機種を使用。最初の飛行はドローンに積んでいる通信機器の電波が影響し、計器の誤作動となり、トラブルで失敗に終わったが、予備機を使った2度目の挑戦では片道3分程度の速さで物資を運び、無事に須田港と栗島との往復を行った。

かもめやの小野正人社長も「ドローンと遠隔医療を組み合わせた試みで、次のステップに向けた第一歩になつた」と評価した。

栗島は人口210人余りで、須田港との間を所要時間15分の定期船が運航。医療機関は市の診療所が設置されており、週に2回、診療が行われている。

ドローン×遠隔診療 実現へ



遠隔診療の実証実験で栗島に向か離陸したドローン＝三豊市詫間町、須田港